元社畜で兵士の提督生活

sironio

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラック企業一歩手前の社畜が買った宝くじが当たり、何故か見ていた平行世界の自分に入れ替わられる。

その世界は艦隊これくしょんの世界であり、主人公は人間の兵士だった。

エラー娘（神様）からの説明もあったが、訳もわからないまま死屍累々の異世界での目覚めの最中、艦娘がドロップしたお陰で提督としてやっていく事になった。

目次

始まり 1
始まり2 12
もう一人 19
社畜の片鱗 26
鎮守府へ 31
回復と変化 37

始まり

高校卒業してすぐに就職した。何処にでもあるような兼業農家の長男で家には大学に行くような余裕は無かったから、大学にいってやりたい事を見付けたいと思った事もあるけど、やりたい事が決まってないのに先に進んでも意味ないだろと自分に言い訳して諦めた。

せめて妹弟は大学に行けるようにという考えもあったが、結局妹も就職し弟は専門学校を選んだ。

趣味はかわいい女の子たちが中心のアニメやゲームを楽しむことで、特に艦これは一度あまりのイベントの難易度の高さに止めてしまったが一年前に復活してはまっていた。嫁は長門と加賀、そして龍田。

あとは精々、宝くじを毎回いくつか買うくらいだ。万が一当たったらあのブラックみたいな仕事を辞めて日本一週でもしたいなと思う。

そう、思ってた。だって夢なんて当たらないから、夢なんだから。

ふぁっ!?ゆ、夢か?宝くじ当たった……しかも一等である。
何度も確認して興奮して机に脛ぶつけて滅茶痛い……夢じゃねぇな、間違いないことが分かると我慢できずに叫んでしまった。
「よっしゃー!!」
『ずるいな』
「は!?」
回りには誰もいなかった筈……いや、自分の部屋だし間違いなくいない……まさか、頭の中に直接?いやいやいや、疲れてんのか?
『代わってくれ』
「っ!?」
やっぱり聞こえる!?周りを見渡しても誰も居ないのに?
その瞬間にヌルリと何かが体に入ってくる感覚と同時にズルリと引き摺り出される感覚、自分の体が目の前に……いや自分と目が合ったのを見た瞬間、急激に景色が変わり首根っこを捕まれて一回転した後叩き込まれたかの様な訳の分からない感覚がして、いつの間にか閉じた目を開けた瞬間俺は水に浸かっていた。
ゴボボッ!ザバッ!!
「ガハッー!ゲボッー!オエェしょっぺぇ!っあ!?いてぇ!?っ～～～～～～～～～!!なん

だこれ!?」

水を飲み込んで驚き余りの塩辛さと余りの痛みにのたうち、更なる痛みに悶絶しながら自分の状態を確認すると場所は砂浜、明らかに折れ曲がった左腕と痛み方から肋が複数折れている様だ、更に回りには自分と同じ様な格好の奴等がゴロゴロと転がっていた。

宝くじ当たったの確認して誰かの声を聞いた後に間髪入れずにこの状況である。全く理解できないまま呆然としていると、突然自分のモノでは無い記憶が頭の中に流れ込んでくる。

簡単に言えば艦隊これくしょんの世界をベリーハードにして、艦娘だけではなく人間も試験的にだが海に投入されている世界。

人間が海に投入されるに辺り人体実験が行われ、この体の主は平行世界の自分であり実験台にされている事も分かった。高校卒業後就職して直ぐに拉致されてから、肉体の強化に始まり艦娘や深海棲艦の細胞の移植等も行われており、海上で人間が戦う為の装備の実験台にもされて何度も死にかけていた。

実際に経験してないのに経験した記憶があると言う訳の分からない状態、その時何をされたかが事細かに思い出される。

そんな鬼畜な世界でも何とか生き延びて現在は海軍特別海上機甲隊隊長補佐、八城支門少尉として日本海側に強襲して来た深海棲艦を迎え討ったのだった。
射撃しながら近付いて駆逐艦の一体に薙刀を突き刺したのは覚えてるんだけどその先の記憶がない、結果として相討ちとなった様で軽巡二隻と駆逐艦三隻が近海に沈んでいるのが見えるが一隻足りない。
「キィィ……」
仲間の死体の影でボロボロな駆逐艦が苦しそうに此方を見上げている。
あぁ、お前だって苦しいよな……直ぐに介錯してやる。
落ちていた槍を拾い突きつけても大人しくしていて、まるで本当にそれを望んでいるかの様だ。
片手だが勢いをつけて全体重で突き入れた。
出来れば次は艦娘として生まれてきてくれ……
ちょいちょいと指でつつかれた気がして少し視線を落とすと、エラー娘が馴染みの姿で猫を吊るして立っていた。
『いやいや困ったねー不運だったねー。死にかけた奴が異世界の自分と入れ替わると

か、全く想定してなかったから滅茶苦茶焦ったよ。急遽致命傷だけ治癒させたけど全く説明しないのも酷いから来ました』

「……あ、ありがとうございます?」

入れ替わり?宝くじ当たったと思ったら異世界?確かに憧れはあったけどタイミングがひどいよなぁ……あと年齢な、今年で三十五だぜ?とっくにオッサンなんだが?何故あと十年早くしてくれなかったのか……

『いえいえ、これも仕事ですから。艦これの知識が有ったので助かったよ。前の彼の記憶は見せたのである程度状況は理解したよね?』

「まぁ、はい」

考えてる場合じゃないな、話しちゃんと聞かないと

『しょうがないから体のバランス調整と、ちょっと能力なんかはプラスしといたから後は頑張ってね……あぁ、ちょっと周りの人の記憶も貴方に合わせて弄って都合よく納得とかしやすい様にしておくから。あと面白い知識もあるみたいだし参考にさせてもらうね。じゃあね』

そう言って手を此方に振った後に陽炎のように姿が薄れていった。あれ!?結局説明らしい説明全く受けてないんだけど?状況分かっただろ?後は頑張れ的なやつなのか?

とりあえず生存者を探したが意識の無い隊員が一人、隊長の天宮大尉及び隊員八人の戦死を確認、結局二人だけが生き残りだった。部位欠損の死体ばかりで三回ほど吐いちまった。

実験施設出身が多かった為に外部とろくに接触出来ない部隊だった……まともに会話出来ないやつだっていた。

そんな中仲がよかったのは、群を抜いてまともだった天宮隊長……ただし、アニメのキャラに成りきって戦う事以外、バトルジャンキーでハン○ーｘ２のヒ○カのちょっと変態じゃない感じの礼吉、何時もニコニコしてるけど何考えてるかわからなくて隊長の側にばかりいた黒髪ロングの爆乳スナイパー龍間、本ばかり読んでいる無口なボイス○イドのまな板紫髪風の人弓月、やはり変な奴等ばかりでどこかしらに欠陥を抱えていた。ちなみに生きてたのは無口なまな板紫髪だ。

他のやつは……それなりに会話も出来るが薬が無いと動けなくて常にに泡吹いてる奴、ヤバいのだと会話が成り立たず常に目が血走り誰彼構わずに襲いかかる奴まで居た。

それな部隊でもたった一人仲間が生きていてくれて嬉しかったがここは無人島、応急手当てはしたが無線も海上装備も壊れていて助けも呼べない状態、捜索隊は出ているだろうか？正直殆ど期待出来ないがエラー娘が言っていた、周りの人の記憶も都合がいい

ように弄っておくという話がやけに引っ掛かっていた。まぁ仮に出ていたとして見付けてくれるまでに俺も含めて保つだろうか？

チャプンという水音と

「あんたが司令官ね。ま、せいぜい頑張りなさい！」

突然聞こえた声に振り返ると、後ろには艦これでよく知っている艦娘が立っていた。

「む、叢雲？」

「へぇ、分かるの？まぁ名艦だもの知っていて当然よね」

自慢気に胸を張っているがこれ言ったらガッカリされるのではなかろうか？言わなければ言わないで後でどやされそうだから言うしかないのだが……

「俺、提督じゃないんだけど」

「なんですって!?どういう事よ!?や、やだ……ありえない……」

やはり滅茶苦茶落ち込んでいる。

「落ち込んでる所悪いんだけどとりあえず助け呼んでもらえる？」

「……あぁもう、いいわ！　やってあげる。高くつくわよ？　覚えてなさいな！　貸しにしといてあげる」

暫くして見えてきたのは七人の影だった。

「第三十八鎮守府所属第三艦隊旗艦重巡古鷹です。御迎えにあがりました」
「特別海上機甲隊隊長補佐八城支門少尉です。感謝します」
「任務完了よ！貸しだからね。キッチリ覚えておきなさい！」
「……ありがとう」
「海上兵の皆さんは喋らないと有名だったので意外です」
　特別海上機甲隊は別名人柱とか海上兵とか言われているらしい。喋らないというより余計な事しない様にヘルメットでコントロールされてるんだよね。そう言えば前に爆破された奴見たことあるし壊れてて助かったわ。
「あー、喋らないと言うより喋れないですね。自分は気付いたらヘルメット壊れてたので大丈夫ですけど、無理に外したり指示以外の事すると爆発しますからねぇ」
　これもう事情説明して助けて貰った方がいいよね？この世界の提督は真面目で正義感強い人の割合高いみたいな記憶あるし、何だったら提督になれる様に交渉した方が安全な気がする。
「ええ!?爆発!?」
「我々が生きているのも事故みたいなものです。捜索隊とか出されてましたか？」
「……いえ、確かに生存者無しと聞いていました」

「ですよねぇ……どうしましょう」
「うちの提督に掛け合ってみましょうか？悪い事とか許せない性格ですし力になってくれると思います」
　キターーーー！さすが大天使古鷹！マジ天使！
「あんた、なに鼻の下伸ばしてるのよ!?私ともちゃんと話した事もないのにどういう了見なの!?」
「ちょっ、叢雲落ち着いて気のせいだから、あとちゃんと話しすから……古鷹さんよろしくお願いします」
「……ったく、早くしてよ！」
　苦笑いしながら古鷹は頷いている。
「分かりました」

『そんなバカな話があるか！直ぐに鎮守府に連れて帰りなさい。奴等には痛い目にあってもらおう』
　古鷹の話し通り提督はいい人らしく、親身になってくれた上に俺が置かれていた環境に激怒してくれた。
『一応直ぐに確認出来そうな彼の名前と他の隊員の名前が聞けるなら聞いてくれ』

隊員の名前は全て覚えていたので順次あげていった。
最後に生き残りの名前を言った途端に声色が変わった。
『弓月優花だと!?もしかして紫髪のペッタン娘じゃないか!?』
「確かに紫髪で……ペッタンですが……」
『そうか、恐らく間違いないな……わかった。ありがとう』

そこから大本営に話しが行き更にとんでもない事が分かった。
隊員の全てが現提督のなんらかの血縁関係にあるらしい、提督になれる素質と艦娘との親和性は血縁が関係するのかの調査と、別な要因があるのかの研究が元々の目的であったことだ。
人工的に提督を作る事が出来れば軍事力を手に入れたも同然である。
結局提督を作る事は失敗した様だが別な方向の研究へと切り替えられたのだろう。
証言と証拠も見付かった為に研究所は直ぐに一斉に摘発、関係があったと見られる関係者も拘束され捜査される事になった。
都合のいい事に叢雲を見つけた実績から、俺には提督の素質が見られるとして強制的に所属変更され、提督として移動する事になった。
怪我や証人としての役割もあるために直ぐに鎮守府に着任する訳ではなかったが、そ

れでもゲームで好きだった艦これの世界に来てやって行く事に大きな不安と多少の期待に溢れていた。

始まり２

保護されて鏡を見て自分の異形さを始めて知ったのだが、髪の半分は白くなり両目はオレンジ系に、両手両足共に継ぎ接ぎされたように付け根から真っ白に、更には尻尾すら生えている様な状態、これでよく深海棲艦に間違えられなかったものだ……もしかして顔はおっさんだからか？

艦娘の細胞を使って実験台にされていた天宮隊長と龍間、深海棲艦の細胞を使われていた礼吉、人間のみで限界を突破しようとされた強化人間の弓月、そして艦娘と深海棲艦のパーツを移植された俺。

だがそれでも明らかに記憶と違う姿、いい意味でも悪い意味でもエラー娘が行ったと言っていた調整と強化が関係しているのだろう。

思い切って叢雲にだけは入れ替わった事と体の事情を説明したのだが

「……そう、アンタはアンタで大変だったのね」

と言っただけで他のコメントはいただけなかった。

それ以降何やら言いたそうにしたり考え込んだ姿をよく見掛けるようになったが、こんな提督嫌だから着いていきたく無いとか言われないよね……ショックで寝込む自信

がある。

三週間ぐらいは人間ドックとの名目で弓月共々研究所に送られ、本当に真っ裸にひんむかれて隅々まで検査された。

その過程で使われた高速修復材がまさか効くとは思わなかったけど、それが判明してから検査が容赦ない物になってしまった。

最初はナイスバディなお姉さんが現れた時はちょっとだけ期待していたのだが、ニタニタしながらハサミを持って近付いて来た時に全てを察して諦める。

真っ裸にひんむかれて本当に隅々まで調べられた後、普通に全身麻酔された後に解体と解剖って、下手したら施設に居た時と変わらんぞ？

一通りバラされた後に修復材ぶっかけられ、修理された海上装備を渡されて装着したデータも録られた。

因みに弓月は三日後位で意識が戻り、幸いにも？高速修復材が効かなかった為に普通の人間ドックだったらしいので本当に羨ましい。

「あなた面白かったからまた来てね♪」
ごめんなさい嫌です。
二度とごめんです。
非常にマッドなお姉さんに別れを告げてから、辿り着いたのは舞鶴第一鎮守府、ここで深海棲艦や艦娘、そして鎮守府や提督の事を学ぶ事になるらしい。
まさか、辿り着いた先に実の弟の八城正克が居るとは思わなかったが、考えてみれば隊員の全てが現提督のなんらかの血縁関係にあるのだから、少し考えれば誰かしら居ても不思議では無かった。
何故か俺はイレギュラーで関係ない話しだと思い込んでいたが……こっちの家族の事聞ければいいんだけどなぁ。
「兄ちゃん！……ゴホン、色々聞きたい事もあるだろう。一通り案内して貰ってから執務室に来るように。高雄、案内してあげなさい」
久しぶり再開からつい昔通りに呼んじゃったけど、周りの目とか階級を気にして取り繕う童顔の弟まじ可愛いです。
「了解しました」

一通り鎮守府の中を案内された後に執務室に連れてこられた。
案内中は何人かの艦娘とすれ違い挨拶はしたがこれといって変わった事はなく、だからと言って鎮守府内も特に特筆するような事もなかった。
工廠や装備を置いておく倉庫や入渠施設、それに艦娘のプライベート空間等は見せてもらえなかった。
「何か気になった事はあるかな?」
「特には、ただ皆明るくて雰囲気がいいとは思いましたね」
何かボロが出そうなのに無理して頑張ってるの可愛いから此方も合わせとこうか、前の所は暗い雰囲気で人付き合いもあまりなかった様だからこう答えておけば大丈夫かな。
「無理して堅苦しく喋る必要無いんだぞ?折角兄貴見付かったんだしな。ガハハハハ!」
……バシバシ弟の肩を叩きながら弟の努力を無駄にし笑っているおっさんがいるのだが、母方の親戚と紹介されていた人だった。
高校に入った頃から急に現れる様になったと思っていたが、提督適性がある弟の様子を見に来てた軍人さんだったらしい。
というか、中学で既に艦娘ドロップして卒業後海軍学校に入学、三十二歳の現在は少

佐って……出世し過ぎだろ。

一応顔馴染みではあるのだが彼方の世界にはいなかったし、此方の世界だと正義感に溢れる熱血漢な人で暑苦しく鬱陶しいと感じていた。

「うむ。海軍元帥特別補佐官兼舞鶴統括、丹波景昭、階級は中将だ。君の辞令も預かって来ている」

渡された紙に書かれていた事は……はぁ!?三階級特進?何考えてんだよ！いきなり少佐?上層部は馬鹿ばっかりなのか?何でこんな辞令が来るんだよ！舞鶴で教育後直ぐに鎮守府着任はまぁいいとして、普通階級いきなり上にしないよね?日本中に佐官尉官の提督がいるなかで今更過ぎるから、提督の階級おかしいって理由は普通将官なんだから通じないだろ?

考えが読めなさすぎる。

「お前顔に出すぎだ！ガハハハハ！難しく考える必要は無い、気楽にやればいいんだ」

気楽にって、ここ軍だよな?

「真面目な話しをするなら今回の事件に関係してある鎮守府に空きが出来てしまった。ある程度の教育が終わったら直ぐに着任してもらう事になるだろう。前任の提督が残した艦娘も引き継いでもらうから戦力は大丈夫だ」

采配する俺次第ってことかい……

「了解しました」
「うむ。それまで兄弟の再会を楽しみつつ勉強してくれ」

その夜、家族の現状を聞いた。
父方母方共に祖父は老衰で亡くなっていたが祖母は痴ほう症の初期段階だが元気、両親は定年後農家をして喧嘩しながら元気にやっているらしい、残ったのは妹（弟からは姉）だが嫁に行き娘が三人居るそうだ。
祖父については残念だが皆元気らしく安心は出来た。彼方の世界と変わらない状況と家族構成、違ったのは妹の子供の数だが流石にそこまでリンクしないらしい。
俺の扱いは高校卒業後入社直ぐに行方不明、捜索願いが出されていたが実際には全く捜査されずに放置されていた。
更に現状見た目からして異形になってしまっている事と、これまでの境遇の為に面会は禁止されてしまい、弟からの報告で生きている事だけは伝えて貰った。

隊長や他の隊員の装備が形見として送られて来たのだが、後からきた弓月と相談して

仲の良かった人以外の物は供養してもらう事にした。
そしてその弓月なのだが、コイツもある提督の妹であるらしいのだが何故かいつの間にか俺の補佐官として鎮守府に付いてくる事になっていた。
着々と提督としての教育を受けつつ、叢雲や弓月と共に舞鶴第一の艦娘達と演習も繰り返しながら、準備を整える事二週間。
ついに鎮守府着任の日が差し迫っていた。

もう一人

「イィイイヤッホォオオオオウ!!!!」

叢雲とタイマンでの演習中、それも鍔迫り合いの真っ最中に突然弓月が叫び声を上げ、どちらともなく戦闘を中止する。

「は？何事？……ん？は？しゃべった!?今の声ゆかりさん!?」

「……」

「ゆかり入ってま～す♪」

「おぃい？マジで!?」

「……」

「は!?しまった!?やっと同調完了してあまりの嬉しさにテンションがフィーバーして暴走しました」

「ん」

とか

「あ」

位しか喋らずに筆談や動作で意志疎通を図るのに突然の叫びである。

叢雲は開いた口が塞がらずにずっとポカーンとしているし、俺は俺でビックリし過ぎてパニックになりかけていた。
「あぅ、やらかしました」
「いやいやいや!?え?ゆかりさんなの!?」
「ゆかりさんですけど、何で分かるんですかねぇ?」
「……ちょっと待ちなさいよ!アンタ喋れたの!?」
あ、叢雲復活した。
そしてキレそう……あー、意志疎通上手くとれなくてイライラしてたもんなぁ。
「いや、まぁなんと言いますか」
「ハッキリといいなさいよ!!」
「た、たすけてください」
涙目の上目遣いは反則です。
「あー、叢雲、どうどう」
「私は馬じゃないわ！」
「ごめん、先ず落ち着け」
「っ～～！フンッ！」
何とか怒りを飲み込んでくれたらしい。

「とりあえず一つずつ確認しよう。弓月はゆかりさんなの？」
「あー、はい、そうですね。私は弓月さんの体を戴いた結月ゆかりです。弓月優花さんは残念ながら最後の戦闘で亡くなっています。と言っても私が入る際に蘇生しているので、実は一つの肉体に二つの魂が入っている状態なんですけどね。当分引きこもりたいそうです」
最後の戦闘でという事はタイミング的に俺と一緒だな。
引きこもりたいってなんだよ……
俺は魂二つも無いから違うけど似たような状態と言えなくもないか？でも自分の意思で来てる所は全く違うけども。
「それってアンタと一緒じゃないの？」
「え？」
「あっ」
「叢雲さんや」
「……ごめん」
二人だけの秘密だったのにうっかりバラされたんですけど？意外におっちょこちょいなのか？
こうなってしまえばしょうがないのでゆかりさんにも事情を説明することにした。

「なるほど、そうですか。しかも?そちらの世界では私がボーカロイド?として声が使われたり動画やら何やらが作られていると?」
「そうだね」
「しかも胸が無いのもネタにされてるとか?何なんですかその羞恥プレイ……私はまな板じゃない!」
「私はやっておりません」
「……最低」
　生のやつ来ました!ありがとうございます!
「……何でうれしそうなんですかねぇ?」
「気のせいです」
　あぶないあぶない変態扱いされてしまう所だった。
「まぁいいです。私はこの世界に友達を探しに来ました。今は手懸かりすらありませんがきっと見つけ出して見せます」
「……マキさん?」
「はぁ、それもボーカロイドの情報ですか?正解ですけど、誰かそちらの世界に行ったん

ですかねぇ？」

半目のゆかりがこちらを睨んでいるが安定のコンビだしなぁ。マキさんは行方不明で、それを探しに来たゆかりさん、キマシタワー？

藪をつついて蛇出したくないから黙っておこう。

「ねぇ、バラしちゃったのは私が悪いんだけど、そっちのけで会話するのってどうなの？」

「……へぇ、もしかして焼きもちですか？意地っ張りなだけかと思ってたんですけど意外と可愛い所あるじゃないですか。ツンデレキタコレ！」

「な!?アンタ、酸素魚雷を食らわせるわよ！」

「どうどう、叢雲落ち着きなさい。ゆかりさんも煽らないで」

「だから馬じゃないって言ってるじゃない！」

「ごめんごめん謝るから、だからその魚雷発射管は此方に向けないで」

「フンッ！」

何とか落ち着いたがこれから一緒にやっていくのにこんな感じで大丈夫なのだろうか……

とりあえず分かったこと、弓月優花は一度死んでいて中身は結月ゆかり。
俺と同じタイミングで此方の世界に来た。
その際に死んだ優花の魂と遣り取りをして記憶は引き継いでいるのでこの世界の情報は持っている。ってか中に居て引き込もってこちらを見ている。
ゆかりが此方に来た目的は弦巻マキの捜索で、現状手懸かりは無し。
そのうち東北ずん子とかも来たりしてな……ハハッ……艦これの世界だけじゃなくて混ざってんのか？
エラー娘さんよ、一体どうなってんのよ？
『さあ？そちらは私も知らなかったよ』
うお!?コイツ脳内に直接!?
『神様ならテンプレでしょう？』
あ、そういえば知識がどうとか言ってたな……あれ？神様？
『詳しくはその内分かると思うけどね。そう君はこの世界の神と話しているのだ。光栄に思いたまえ、なーんてね。一応監視もかねて当分周囲を見張らせてもらってるよ。気にせず生きなさい』
なるほど、おかしな話しじゃないな。
とにかく、ゲームの世界だと思って油断してると足元掬われそうだな。

慢心、ダメ、絶対

社畜の片鱗

出立する前日、荷物を纏めて廊下に出た瞬間に違和感に気付いた。
消火栓の赤色灯が消えていた。
普通であれば常に点灯していて、ポンプ起動時には点滅する仕組みになっている。
昨日寝る前には間違いなく点灯していた。実は彼方の世界では消防設備士として働いていたために、火災報知器や消火器や誘導灯や避難器具等の消防設備と言われる器具には、癖で目が行ってしまうのだ。
赤色灯の球が切れている可能性はある。だが一ヶ所だけでなく他の消火栓の物まで消えているとなれば、消火栓ポンプの電源が落ちているとしか考えられない。
点検しているならば問題ないが今は朝の五時、普通そんな時間に点検はあり得ない。
嫌な汗が背中を流れた。

執務室に駆け込むと、既に正克が書類仕事に手を出していた。
「兄ちゃん？何かあった？」

「今日消防設備の点検なんてしてないよな？」
「予定にはないけど」
「消火栓ポンプ室ってどこだ？電源落ちてないか？」
「……大淀、明石と夕張に繋いでくれ」
「はい！」
『はい、明石ですけど』
「消火栓ポンプ室を確認してくれ」
『消火栓ポンプですね？了解しました』
『夕張です！』
「前に遊びで使ってたウォーターバズーカと巨大水鉄砲ってまだある？」
『あります』
「人選は任せるから使えるようにして待機して」
『了解です！』
「大淀、警戒体制に移行、不審者がいないか探し出せ」
「俺と叢雲も捜索に加わろう」
「お願いする」

『提督！消火栓ポンプの電源が入りません！』

ジリリリリリリリリ!!

非常ベルが鳴り出したのは明石からの報告とほぼ同時だった。

「場所は!?」

「工廠と入渠施設で同時に発生しました！」

「非常警報発令！他の場所も狙われるかもしれない、厳戒体制！」

「はぁ？抜き打ちテスト？」

「舞鶴統括による不測の事態にしっかり対応出来るかのテストなんだ」

「火事は？」

「妖精さんが協力してるから」

「なんだ妖精さんか」

「はぁ!?火報が直せない？」

「火報？うん、間違って火災報知器の配線ある場所燃やしちゃったみたいで、妖精さんも

専門外だからごめんなさいだって」
「工廠の消火栓脇の壁だよな？」
「うん」
「……工具持って来い」
あー、幹線燃えただけだからストレートジョイントだけで大丈夫そうね。
ん、断線が消えない？
感知器も熔けてるじゃねえか……廊下の感知器外して付けとこう。どーせ階段の感知器あるし警戒面積足りてるし。

「直った!?」
「ああ、とりあえず応急措置な。寄せ集めた電線使ってるから業者にちゃんと直して貰え。あと感知器も熔けてたからそこの廊下の取ってつけたぞ」
「あ、ありがとう？」
一月の平均睡眠時間三時間になるぐらいハードな現場をこなし、一週間徹夜したこともある。
学校の教室で感知器点検してるの見て、メッチャ楽そうとか思って気軽に入社したの

が間違いだったよ。

建築関係はどこもブラック予備軍みたいなものだ……二度と建築関係の仕事には就かないと心に決めていた。

鎮守府へ

迎えに来た船には丹波中将が乗っていた。

「本来ならばちゃんとした任命式やら辞令交付やらがあるんだが、お前は特殊な例だから気にするな。着任する鎮守府にも問題があるしな」

いつものガハハ笑いは無く、いたって真面目に説明をしてくれて辞令書と資料、そして一通の手紙を渡された。

鎮守府は地図に無い島に存在していて島民は居ない、物資や食料必需品は定期便で、施設は拡充済みだが希望があれば妖精さんと相談して改築増築は任せるとの事だ。

前任の熊谷提督は家族を人質にされて脅され悩み抜いた末に艦娘を犠牲にした。しかも、その家族すら実験台にされていて最後に生き残っていた筈の弟も実際は既に命を失っていたと発覚した。

この事実をしった日の深夜に自殺を図ったらしく、一命は取り留めたが精神病院へ入院となってしまった。

遺書には鎮守府全ての人間への感謝と謝罪、そして海軍上層部への謝罪と恨みと、新

任となるであろう俺への願いが書かれていた。

見ず知らずの君にこんな事を頼むのも筋違いだろう。
ましてや手紙で等と失礼なのは重々承知しているが、恐らくこの手紙が君に届く頃私は口が聞けなくなっているだろう。
本当にすまないと思っている。
私の過ちにより多くの艦娘が鎮守府を去ってしまった。
残ってくれた艦娘が君に失礼な事を言い、行うかもしれない、どうか願わくば寛大な対応を、切に、切に願う。
そして可能ならばあの娘を救って欲しい。

鎮守府に所属していた艦娘は最大時で三十六名だったが、事件の影響や俺が着任する等の理由で移籍して、現在は十一名。
例の研究所に差し出されたのは二名、両名が他の娘が傷つくよりも自分がと立候補した。結果、実験台にされた挙げ句に材料として扱われた。

そう、俺達海軍特別海上機甲隊隊員達の移植された細胞、それどころか目や腕や足等も切りはずされて深海棲艦の物を移植されて実験に使われた。
その過程で出たパーツを継ぎ接ぎされたのが俺となる。
実験により欠損した部位には更に無理やり深海棲艦の余ったパーツを流用して……
その過程で一名は耐えられずに轟沈、残った一名は鎮守府に送り返されたが、常に入渠していないと拒絶反応を起こす為にずっと身動きが取れなかったらしい。
そして残った艦娘の名は長門、轟沈した艦娘の情報は書かれていない。
長門は俺が艦娘をやっていた時に一番のお気に入りで、第一艦隊に常に入れていた。
考えてみれば艦これの初期艦も叢雲だし、色々と縁が有るのかもしれない。
その叢雲は難しい顔で考え込んでしまい、何か話しかけても生返事しか返さない。
一つだけ都合のいい考察があって、研究所で轟沈した艦娘は叢雲で、俺が止めを指した深海棲艦も叢雲、しかもドロップして記憶まで持っているなんて、そんな奇跡。

「貴方も被害者なのは分かっているわ。でもお願い。何でもするから、姉に、長門に体を返して！お願い」
「長門さんを助けて下さい。以前のような自信と威厳に満ち溢れた長門さんにもう一度

会わせてください」
「長門さんは私達を庇って身を差し出したわ。私も出来る事なら何でもするわ。だから、長門さんを助けて下さい」
「しれえ、雪風は、沈みません！ずっとずっと、しれえの艦隊で頑張ります！だから！長門さんを助けて下さい！」
「長門は大事だ。長門無くしてはこの鎮守府は戦えぬ。我々の仲間をこれ以上奪わないでくれ。どうか長門のやつを助けてくれ」
そして目の前に並ぶ五人の艦娘、陸奥・酒匂・五十鈴・雪風・磯風が言葉は違えど同じ様に、長門に体を返してくれ、助けてくれと懇願される。
叢雲は黙っているが険しい顔で見ているし……
とても、ん？今何でもｓ……とかネタに走れるような空気では無い。
土下座されしがみつかれて返してくれと言われても、どうすればいいんだよ？助けてくれエラー娘……ぁぁ、こういう時に限って反応が無い、無理だよなぁ。
同じ船でゆかりさんの艤装もようやくメイン武装が修理されたのが届いたので、そちらの調整を船着き場でしているため此処には居ない。船の中からずっといじくり回してるんだけどそんなに時間かかるのか？
「とりあえず一度長門に会わせてくれ」

「む？提督か？すまないな無様な姿を見せた挙げ句にドックを一つ占領してしまっている。解体してくれて構わん……先代は何度頼んでもしてくれなかったんだ」
「長門？馬鹿な事言わないで！っ、提督！」
「分かってるから！しないから！睨むなよ陸奥」

南方棲姫の様な左腕
真っ赤な瞳
左側から白く変わり始めている髪
放っておけば今にも深海棲艦になってしまいそうな見た目と、相反した弱気な長門の様子。
エラー娘、頼むから助けてくれ。これは俺にはどうにも出来ない。本当に女神だと言うのなら……助けてくれたら神社作って奉るから。……お願いします。
『えー、この度はご迷惑お掛けして申し訳ありません。姉の杜撰な対応と後回しになってしまった事を御詫びすると共に、これより緊急メンテナンスにはいります！』

土下座の姿で現れた二代目エラー娘、捲し立てるように話し、突然俺も長門の脇に入渠させて、大量の妖精さんを召喚した。

そこ！引っ張るなって！分かった大人しく入るから!?危な!?飛んでくるんじゃない！

色んな方向から引っ張られるし引っ付かれるのでまるでガリバーのような気分だ。

いつの間にか猫をぶら下げたエラー娘が後ろに居て、他にも増えている？

『起きてられると大変だろ？』

『えー、結局姉さんも来たんですか？めんどくさがってたのに』

『まぁまぁ姉さん達、ちゃっちゃとやっちゃいましょ』

『神社、三姉妹でよろしくな？おりゃっ』

馬鹿な……三代目？エラー娘揃い踏みだと？……プスッ？……あれ？何かさされｔ……ガクッ……

起きると全てが終わっていた。

回復と変化

目を覚まして最初に飛び込んできたのは、陸奥がワンワン泣きながら長門に抱き付いている姿と、暖かい目で見守っている他の艦娘達の姿だった。
エラー娘達は居ない様だ。
あとから妖精さんに頼んで神社作らないとな。
御神木は桜がいいかな？
それとも周りを桜で囲むか？
三つ作るか一つに纏めるか、リクエストとかあれば参考にするんだけどねぇ。まぁどうせそのうちまた頭の中に語りかけて来るでしょ。
最初のお供え物は羊羹とお茶でいいかな。

「気が付いた？アンタ大丈夫なの？」
「まだダルいかな」
「もう少し、ダルいのが抜けるまで入ってなさい。ほら、これ」
「あぁ、ありがとう」

麻酔の影響なのか体がダルく感じるが動くぶんには問題なさそう、怒られそうだから大人しく入渠している事にした。そんなことを考えながら、叢雲が差し出してくれた手鏡を軽く礼を言いながら受け取ったのだが、容姿がまた変わってしまっていた。

半分だけが白かった髪は完全に白髪に変わり、オレンジっぽかった両瞳は片目が赤になり、両手両足が継ぎ接ぎされた感じなのは変わらなかったが、尻尾は多少可愛げはあるがレ級の様になり、尚且つ二尾になってしまった。

何故かこの尻尾見てると犬を連想してしまうんだが、エラー娘何か変なことしてないよね？

顔風呂から出して気持ち良さそうにしてない？

え？別な意識とか宿ってないよね？あ、こっち見た……尻尾振ってるビジョンが見える……取り敢えず頭撫でとく……あー、目茶苦茶喜んでるわ。もう一匹もこっちも撫でろって頭押し付けてくるし、あー、よしよし。

これ大丈夫なのか？艦娘見ても破壊衝動とかないみたいだけど、俺自身も最早深海棲艦の見た目だぞ？オヤジ顔な以外。

「……はぁ、なんなのよそれ？完全に犬ね。……それにしても信じられないわ、提督がこんな状況なのにあんなにはしゃいじゃって」

「しょうがないんしゃないか？久しぶりにまともに動けてるんだろうしな。腕は治せな

かったのか」

そう、長門の目や髪の色は治っているのだが、左腕はそのまま南方棲鬼の様な形になっている。

だが問題なく動けてはいるようだ。

「……アンタの体、それ以上深海棲艦のパーツ入れたら比率が片寄って危ないそうよ」

「だからか……叢雲にも返したかったんだがな」

「っ!?何の……いえ、気付いてたの？」

予想は当たっていた様だ。

おかしいとは思っていた。叢雲の右目が赤いことと片足がやけに白っぽい気はしていたのだから。

「やっぱりかぁ」

「かまかけたわけ？」

「だったら良いなとは思ってたよ。何か言いたそうにしてたし」

「……ごめん。後でちゃんと話すわ」

なんとなしに周りを見渡して長門と目が合うと、こちらに向かってきた。

「提督、ありがとう」

深々と頭を下げ礼を言う長門は言葉を続けた。
「早速だが、直ぐにでも出撃させて欲しい」
イキイキとした表情で自信たっぷりに言われたが、答えは決まっている。
「却下、絶対駄目」
「何故だ」
いやいや、驚くなよ？普通に考えれば理由なんて分かるだろうに。
「そうよ！せっかく姉さんがやる気なのに！」
あらあら、この娘、残念な娘？陸奥は持ってなかったからよく分からないのよね。
姉が復活して嬉しすぎておかしくなってるだけなのを祈ろう。
「馬鹿たれ、長いこと動いてなかった奴を前線に出せるか……暫くはリハビリと演習だな」
「私はやれるぞ！」
「いい加減にしなさいよ！」
ついに我慢出来なくなったのだろう。
バチンという大きな音がして、長門が頬を押さえて後ずさる。
「ちょっと⁉なんなの⁉」
頬を押さえて立ち竦む長門と、対照的に大声を上げて叢雲に詰め寄る陸奥。

「陸奥！アンタは引っ込んでなさい！……長門！私との約束忘れたわけ？今のアンタ、みっともないわよ？」
「む、叢雲？……っ!?まさか、いや、しかし……お前、なの、か？」
「さあ？どうかしらね……提督、執務室で待ってるわ。五十鈴、提督の案内よろしくね」
「はい！……え？あ、ぁぁ」
シャキッと姿勢を只して返事をする五十鈴、昔からそういう関係だった故の条件反射だろうか、自分の行動に驚いた後に理解して泣き出した。
呆然としていた長門も両目から涙が止まらない。
その一方で何があったのか理解が追い付かない他の艦娘も、五十鈴の様子からある程度は察したのか泣き出す娘ばかりだった。
つまり、風呂に入ってグッタリしている俺の回りには泣いている娘しかいないわけで、かといって何て声をかければいいかも分からずに、気まずい時間を過ごしていた。

「五十鈴です。提督をお連れしました」
「五十鈴には悪いんだけど、提督だけ入って」
「はい、どうぞ提督」

五十鈴が頷いたので俺だけが中に入る。
叢雲がいたのは入って正面にあるソファーの方、既にお茶が用意されていた。
「座って？」
「ああ」
「どこから話そうかしら、やっぱり最初からの方が分かりやすいわよね」
「確かに、なるべく時系列があってた方が分かりやすいな」
それから叢雲は語り始めた。